

# 日本人に間違いやすいドイツ語の語順

トーマス・ミヒヤエル・グロース

## Abstract

Japanese and German as languages do not share a lot of linguistic features. And it is well known that a foreign language learner's mother tongue predestines the mistakes this learner is likely to make while learning a foreign language. This kind of mistake is called an "interference mistake". In this paper, I will concentrate on interference mistakes involving German word order. First, I shall compare English and Japanese, and then I will introduce German. In particular relevant are case, the structure of the German verbal predicate complex, typical locations of complements, subordinate clause structure, and the German functional sentence perspective. Then I will show in detail where Japanese who learn German are likely to make mistakes. One important result of this study is the insight that Japanese make more interference mistakes from English to German, than from Japanese to German. It is therefore politically desirable not to over-emphasize English language instruction because it is likely to hamper foreign language education of other foreign languages.

## 0. はじめに

外国語を習い始めるとともに、間違えることがよくあって当然である。間違えるのは、おもに個人的な問題であり、よくある例をあげると、語彙知識不足である。つまり、個人は自分で単語を習わないと、間違えるところもおおい。しかし、この個人的な面とは別に、制度的な間違えの原因もある。外国語を習おうとする人は、その外国語が母国語ではないからこそ、習いたがる。習いたい外国語と習いたい人の母国語は違った言語なのである。

母国語は習わなければならない言語ではなく、むしろ自然と身につけるコミュニケーションの技術である。人々は、きちんと習わないと、自分の母国語の文法規則をよく知らない。言語を自然と身につけるのは、人間の脳に極めて大きな負担なので、身につけてから、母国語と違った別な言語は習いにくくなる。特に、母国語の文法規則は脳の中で固まっているの

で、それと違う規則を記憶に加えるのは、時間と厳しい訓練が必要になる。つまり、母国語の文法は脳の中に言語と関係がある部分を独占してしまい、別な言語を習うと同じ部分を利用しないといけないから、脳の中では言語戦争みたいな状態になる。

## 1. 日本語と英語

日本人が始めて習う外国語はほとんど英語である。日本語と英語は、言語学的な立場から見れば、極端に違う自然言語である。一番重要なポイントをあげると、日本語の述語は文末に出ており、英語の述語は平叙文の主語の直後にでる。日本語では、述語以外の文成分はわりと自由であるが、英語の文成分の語順はわりとかたく決まっている。これとともに、日本語の文成分は格助詞があるため、自分の格を明らかにする。一方、英語には、代名詞にだけ格が残っている。言語学の研究で分かってきたのは、格の印が明らかになっていけば、なっているほど、文成分の語順が自由になることである。

機能的な面でも、日本語と英語は大きく違っている。英語には「the」と「a」の冠詞があるが、日本語には冠詞がなく、連体詞だけしかない。英語の「the」と「a」の機能的な使い分けは日本語が格助詞と「〜は」の係り助詞を利用しながら、表す。例えば、

(1a) The man came.

(1b) A man came.

のそれぞれの文は日本語に訳したら、次のようになる：

(2a) 男は来た。

(2b) 男が来た。

言語技術を見てみれば、日本語と英語の異なるところは、英語は新しい情報を表す名詞的な文成の前に「a」を、古い情報または前もって知られている情報を表す名詞的な文成の前に「the」を置くことになっている。一方、日本語は新しい情報をマークしないで、古い情報を表す文成分の後に「これから新しい情報が始まるよ！」みたいなことを表す「〜は」をつける技術にしている。

英語には、新しい情報と古い情報を区別するほかの技術もあり語順変化である。例えば、次の英語の文は、同じ単語が出ているにもかかわらず違っているコンテキストにでてる：

(3a) I had fish yesterday.

(3b) Yesterday I had fish.

一番有効な確認方法は、(3) の文を違う疑問文に対する答えと考えることである。

それに従って、(3a) は (4a) に対する答える文で、(3b) は (4b) に対する答えでしょう：

(4a) When did you have fish?

(4b) What did you have yesterday?

(3) の答える文は交換できるが、そうすると、「fish」か「yesterday」に極めて強いアクセントを置かないと、不自然になる（太い文字はアクセントをマークする）：

(5a) When did you have fish? —Yesterday I had fish.

(5b) What did you have yesterday? —I had **fish** yesterday.

これはいったいなぜだろう？ 自然言語は次元が一つだけあり、それは「時間」である。自然言語では、早い文成分は古い情報を表すのが普通であり、遅い文成分は新しい情報を表すのである。上の例文 (5) を見ると、(5a) で求められる情報は「いつ？」で、(5b) で求められる情報は「なに？」である。求められる情報は知りたい情報なので、まだ知らない情報、つまり新しい情報と同じである。新しい情報は普通は遅い文成分として表されるので、普通の語順またはより早い文成分で表されると、「この文成分は新しい情報だよ！」という印をつけなければならない。英語ではこれをアクセントで表す。

一般的に言えば、英語には、古い情報を表す分野と新しい情報を表す分野がある。その限りは「主語・述語・目的語」の複合体である。英語では、主語はほとんど（文体によって例外もある）述語の前にでており、目的語ができれば、述語の直後にでる一般の規則がある。つまり、次のようである：

(6) [古い情報] 主語・述語・目的語 [新しい情報]

もう一度 (3) と (4) の例文に戻ると、なぜ (3a) は (4a) の答えで、(3b) は (4b) の答えなのか明らかになる。(4a) は「いつ？」について聞く疑問文なので、知りたくて新しい情報は「yesterday」であり、これを文末のほうに置く。

一方、(4b) は「なに？」について聞く疑問文で、つまり、目的語について聞く疑問文である。目的語は複合体の部分なので、動かすことはできない。最後におく方法は、副詞の

「yesterday」を前に動かすことである。

つまり、英語の主語・述語・目的語から成り立っている複合体は、古い情報と新しい情報を分けるものである。一方、日本語には、述語はいつも文末にでるから、日本語でも古い情報は新しい情報の前にでるにもかかわらず、古い情報と新しい情報をきちんと分ける複合体などはない。このため、日本語は「～は」という助詞を利用するのである。

まとめると、自然言語では、古い情報は新しい情報の前にでている。それは合理的である。つまり、新しい情報を適当に評価するために、まずセッティングを設けるわけである。このセッティングはすでに知られている情報を含む。

次に、格が限られれば限られるほど文成分の語順も限られている。英語の格は極端に限られているため、特に複合体の成分の語順は全然自由でない。逆に、格の多い日本語には語順変化も多い。語順を固めた言語では、複合体が特別な役割をはたすこともありうる。英語には、こういう複合体があり、これが古い情報と新しい情報をきれいに分ける。

語順のわりと自由な自然言語には、複合体はありえなく、それらの言語では、古い情報と新しい情報を形態論的に表さないといけない。日本語は古い情報を表す文成分の後に「～は」をつけながら、新しい情報の焦点を設ける。

更に、英語のような語順が固い言語では、複合体に含まれる成分が新しい情報を表せば、また別な道具が必要になる。複合体の成分の語順は全然変化できないので、英語の「the」か「a」のような冠詞も必要になる。このため、(1a)の新しい情報を表す主語は普通に古い情報を表す位置にでている。

## 2. ドイツ語

私が上に日本語と英語の語順の重要なポイントを論じた理由は、日本人にとって母国語は日本語で、第一外国語は英語なのである。つまり、ドイツ語を習おうとする日本人はほとんどすでに外国語として英語を習ってきたわけである。

しかし、英語とドイツ語は双方ともにゲルマン諸語であるにもかかわらず、異なるところがかなりある。

### 2.1 格

英語と違って、ドイツ語の格体系はまだ明らかである。名詞はもう格をあまり表さなくなったが、ドイツ語の冠詞では格の区別がはっきりしている。格を求める品詞は動詞と前置詞であるが、特別な格を求める名詞は極めて少ない。

ドイツ語には、四つの格がある：主格・所有格・与格・対格である。名詞と代名詞には文法上の「性」も「数」もあるので、冠詞は24語ありうる。

しかし、ドイツ語の複数形を作るとともに、どの性の名詞をも女性名詞にする省略的な方法がある。

まず、定冠詞を見よう。英語には「the」しかない。

定冠詞		男性	女性	中性
単数	主格	der	die	das
	所有格	des	der	des
	与格	dem	der	dem
	対格	den	die	das
複数	主格	die		
	所有格	der		
	与格	den		
	対格	die		

図1 ドイツ語の定冠詞

英語の「a」の不定冠詞と同様な機能をはたすドイツ語の不定冠詞は、英語と全然違わず、複数形がない。

不定冠詞		男性	女性	中性
単数	主格	ein	eine	ein
	所有格	eines	einer	eines
	与格	einem	einer	einem
	対格	einen	eine	ein

図2 ドイツ語の不定冠詞

英語の代名詞には「人称」と「数」の区別があり、ドイツ語にもそうである。

代名詞		1人称	2人称	3人称		
				男性	女性	中性
単数	主格	ich	du	er	sie	es
	所有格	meiner	deiner	seiner	ihrer	seiner
	与格	mir	dir	ihm	ihr	ihm
	対格	mich	dich	ihn	sie	es
複数	主格	wir	ihr	sie		
	所有格	unser	eurer	ihrer		
	与格	uns	euch	ihnen		
	対格	uns	euch	sie		

図3 ドイツ語の代名詞

このように、ドイツ語の格は極めて明らかに表せる。上にまとめたポイントに従って、ドイツ語の文成分は英語より自由に動かせることが予想できる。

## 2.2 複合体

ドイツ語にも複合体というものがある。しかし、英語と違って、ドイツ語の複合体は連続的でもないときもある。その上、ドイツ語の複合体は動詞だけから成り立っている。ドイツ語の複合体は「ワク構造」を示す。このワク構造はゲルマン諸語の一つの重要な特徴であるが、格の明らかなさがあるところまで減ると、主語と目的語を直接に述語のとなりに置かなければならなくなるので、ワク構造も維持できなくなる。ゲルマン諸語にはドイツ語と英語以外スカンディナヴィア語とオランダ語があり、ワク構造は現代ゲルマン諸語でドイツ語にしかない。

具体的な例文を見よう：

- (7) I have eaten an apple. (英)
- (8) Ich habe einen Apfel gegessen. (独)

英語の (7) では、過去分詞「eaten」は述語の「have」の直後にでる理由は、「have」は他動詞なので、目的語を求め、この目的語として過去分詞を取る。つまり、「an apple」は「have」の目的語ではなく、「eaten」の目的語なのである。更に、「eaten」は「have」の目的語である。英語の文法規則により、目的語は自分にかかわることばの直後にでなければならない。

ドイツ語の (8) で、過去分詞の「gegessen」が文末にでる理由は、ドイツ語の目的語はかかわることばの直後にでる必要がないからである。この現象は過去分詞がでる文に限られなく、話法動詞にもそうである。

- (9) I can understand Japanese. (英)
- (10) Ich kann Japanisch verstehen. (独)

英語の「can」は助動詞と見られ、助動詞の直後に動詞がでなければならない。

しかし、ドイツ語の同様な役割をはたす動詞は助動詞ではない。従って、「話法動詞」と呼ぶのが適当である。ドイツ語の話法動詞は名詞・代名詞的な文成分とともにでてもよいが、英語ではそうできない。

- (11)\* I can it. (英)
- (12) Ich kann es. (独)

つまり、ドイツ語の語法動詞は完全な他動詞なのである。語法動詞とともにでる動詞は文末にでる。それはいったいなぜか？ ドイツ語には、三つの重要な文型がある：平叙文・疑問詞なしの疑問文・副文である。これら三つの文型のうちでは副文の文型が一番古い語順である。この語順は日本語の語順と同様に述語が文末にでる構造である。現在言語学の考え方によると、どの自然言語でも述語が文末に出る構造から進化してきたのである。現代英語にはその証拠がないが、古代英語を調べると証拠が見つかる。

ドイツ語の副文を見ると、目的語は動詞の直前にでることが分かる：

(13) ...that he can understand Japanese. (英)

(14) ...dass er Japanisch verstehen kann. (独)

英語の副文と平叙文の語順が同じ理由はやはり格が不明なことにかかわる。しかし、ドイツ語では、格は明らかなので、主語とほかの文成分は誤解されないから、日本語と同様に文成分をすべて動詞の前に揃えてもよい。副文から疑問詞なしの疑問文を作るには、述語を文末から文の始まりに動かすだけでよい。

(15) Can he understand Japanese? (英)

(16) Kann er Japanisch verstehen? (独)

更に、疑問詞なしの疑問文から (10) のような平叙文をつくると、主語を文の始まりに動かす。ほかの文成分の語順は変わらなかったなので、(8) の過去分詞「gegessen」も (10) の不定形「verstehen」も文末にでることになる。

ドイツ語の平叙文における複合体は次の形になる：

(17) [文成分] 定形動詞 [文成分等] 不定形動詞

英語とドイツ語を表面的に比較すると、語順が同じではないかとよく思ってしまう。しかし、もっと深くまで見てみれば、すぐに大きな違いが現れる。例えば、(3a) と (3b) をそのドイツ語に訳した文と比較しよう：

(18a) I had fish yesterday. (英)

(18b) Ich hatte gestern Fisch. (独)

(19a) Yesterday I had fish. (英)

(19b) Gestern hatte ich Fisch. (独)

上に述べたとおり、英語の目的語は述語の直後にでなければならず、ドイツ語の目的語は右の「不定形動詞」のワクの直前にでなければならない。このため、(18)では、英語の「yesterday」は述語と目的語との間にではいけなく、目的語の後にでる。一方、ドイツ語では、目的語が最後の文成分になっているから、「gestern」は左の「定形動詞」のワクと目的語との間にでる。

(19)では、英語の述語の前には、文成分が二つある。しかし、ドイツ語の左ワクの前にはただ一つの文成分が現れる。つまり、英語の複合体は連続的で、前にも後ろにも文成分はいくつもありうるが、ドイツ語の複合体は確固で非連続的であり、ワクの中には、文成分はいくつもありうるが、左ワクの前には一つの成分しか出かぬる。

### 2.3 文成分の位置

自然言語は自由な語順変化を示していながらも、どの文成分には基本的な位置がある。語順変化というのは、ある文成分をその基本的な位置から前に動かすだけである。

そこにも、英語とドイツ語と大きな違いがある。英語では、複合体の前に動かす文成分の数はあまり限られていないが、文成分のタイプは厳しく限られている。つまり、複合体の部分である文成分は動かしてはいけない。一方、ドイツ語では、左ワクの前に動かせる文成分の数は一つに限られているが、文成分のタイプは限られていない。様々な例文を見よう：

(20a) I have read a book yesterday. (英)

(20b) Ich habe gestern ein Buch gelesen. (独)

(21a) Yesterday I have read a book. (英)

(21b) Gestern habe ich ein Buch gelesen. (独)

(20) と (21) の働き方はすでに上で述べた。これから、英語にできない語順変化の例をあげる。

(22a)\* A book I have read yesterday. (英)

(22b) Ein Buch habe ich gestern gelesen. (独)

(23a)\* Read I have a book yesterday. (英)

(23b) Gelesen habe ich gestern ein Buch. (独)

(24a)\* Read a book I have yesterday. (英)

(24b) Ein Buch gelesen habe ich gestern. (独)

ドイツ語では、動かそうとする文成分のタイプが限られていないので、目的語も前に動か



せるが、それは英語にできないから、(22a) は言えない。更に、ドイツ語では、右ワクの不定形動詞も前に動かせる。また、それは英語にできないから、(23a) は言えない。しかし、不定形動詞そのものを動かすだけでなく、かかわる目的語とともに動かすこともできる。それも英語にできないから、(24a) も言えない。

・ドイツ語の文成分の基本的な位置は、ワクの間にある。左端のほうには、まず主語があり、右端のほうには目的語のような補足成分がある。その間には、任意の添加成分がでる。主語・補足成分・任意の添加成分の中から一つを左ワクの前に動かせる。

(25) [ ] 定形動詞 [主語] [任意の添加成分等] [補足成分] 不定形動詞

左ワクの前の位置は「Vorfeld (前域)」、左ワクと右ワクの間は位置は「Mittelfeld (中域)」と呼ばれ、右ワクの後にも位置があり、それを「Nachfeld (後域)」と呼ばれる。中域のそれぞれの位置は、次のように呼ばれる:「主語」は「Subjekt」、「任意の添加成分」は「Angabe」、「補足成分」は「Ergänzung」と呼ばれる。

そして、「左ワク」は「linke Klammer」、「右ワク」は「rechte Klammer」と呼ばれる。

上にあげた (20b4b) をもう一度図としてあげる：

文	Vorfeld	linke Klammer	Mittelfeld			rechte Klammer
			Subjekt	Angabe	Ergänzung	
(20b)	ich	habe	—	gestern	ein Buch	gelesen
(21b)	gestern	habe	ich	—	ein Buch	gelesen
(22b)	ein Buch	habe	ich	gestern	—	gelesen
(23b)	gelesen	habe	ich	gestern	ein Buch	—
(24b)	ein Buch gelesen	habe	ich	gestern	—	—

図4 (20b~24b) の構造

それぞれのドイツ語の文は同じ文成分から成り立っているが、それらの意味はどう違うのか？ また、それぞれの文を疑問文に対する答えと見ると、意味の区別が明らかになる：

(25a) What did you read yesterday? (英)

(25b) Was hast du gestern gelesen?

— Ich habe gestern ein Buch gelesen. (独)

(26a) What did you do yesterday? (英)

(26b) Was hast du gestern gemacht?

— Gestern habe ich ein Buch gelesen. (独)

- (27a) When did you read a book. (英)  
 (27b) Wann hast du ein Buch gelesen?  
 — Ein Buch habe ich gestern gelesen. (独)
- (28a) What was it that you read yesterday (, a book or a newspaper or what)? (英)  
 (28b) Was hast du gestern eigentlich gelesen?  
 — Gelesen habe ich gestern ein Buch. (独)
- (29a) When was it that you read a book (, last week or yesterday)? (英)  
 (29b) Wann hast du eigentlich ein Buch gelesen?  
 — Ein Buch gelesen habe ich gestern. (独)

#### 2.4 副文

文成分というのは、品詞的な成分だけではなく、副文や疑問副文などの文でもある。そのタイプの文成分は品詞的な文成分と同様に扱われる。例文を見よう：

- (30a) He said that he does not want to come. (英)  
 (30b) Er sagte, dass er nicht kommen will. (独)

副文の「dass er nicht kommen will」は述語の「sagte」の目的語のような文成分なので、補足成分の枠目にでる。普通の文成分と同様に扱えるので、前域に動かせる。英語ではそれは許容されない構造になる。

- (31a)\* That he does not want to come, he said. (英)  
 (31b) Dass er nicht kommen will, sagte er. (独)

疑問副文も同様である。

- (32a) He explained, why he does not want to come. (英)  
 (32b) Er erklärte, warum er nicht kommen will. (独)  
 (33a)\* Why he does not want to come, he explained. (英)  
 (33b) Warum er nicht kommen will, erklärte er. (独)

上には、「後域 (Nachfeld)」のことにふれた。この枠目は任意の添加副文を受ける。

- (34a) He called me when he arrived at home. (英)

(34b) Er rief mich an, als er zu Hause ankam. (独)

更に後域の文成分は前域に動かせる。

(35a) When he arrived at home, he called me. (英)

(35b) Als er zu Hause ankam, rief er mich an. (独)

ドイツ語の関係文は英語の関係文と同様で、かかわる名詞につながっている。しかし、長い関係文は後域にでることもある。この現象は英語にもある。

(36a) She met a man who was a complete stranger to her at the station. (英)

(36b) Sie traf einen Mann, der ihr völlig fremd war, am Bahnhof. (独)

中域にでる文成分にかかわる関係文は長ければ長いほど、後に来る文成分の理解をあいまいにしてしまうこともあるので、そのときには、関係文を文末に置く方法がある。

(37a) She met a man at the station who was a complete stranger to her. (英)

(37b) Sie traf einen Mann am Bahnhof, der ihr völlig fremd war. (独)

しかし、副文の理解を困難にしているのは、役に立たない文法なのである。副文の頭にいつも接続詞がでるという説明が多いが、品詞論的な立場から見ると、それは正しくない。ドイツ語の接続詞には「従属接続詞」も「並列接続詞」もある。並列接続詞は文と文をつなぐとき、上に述べた構造に入っていない。

(38a) She drinks coffee, and he drinks tea. (英)

(38b) Sie trinkt Kaffee, und er trinkt Tee. (独)

つまり、図表で示すと、下のようになる：

並列 接続詞	Vorfeld	linke Klammer	Mittelfeld	
			Subjekt	Ergänzung
	sie	trinkt	—	Kaffee
und	er	trinkt	—	Tee

図5 (38b) の構造

基本的な並列接続詞は「aber・denn・oder・sondern・und」である。並列接続詞と違う従属接続詞は上の構造に入っているが、副文の構造は平叙文と違っている。副文の構造には前域がなく、従属接続詞は左ワクにでるのである。(35b)の構造を見てみよう：

文	Vorfeld	Linke Klammer	Mittelfeld		rechte Klammer
			Subjekt	Ergänzung	
①		als	er	zu Hause	ankam
②	①	rief	er	mich	an

図6 (35b)の構造

(35b)の副文は上の図で「①」と呼ばれ、その副文は「②」と呼ばれる平叙文の前域にでるので、②の前域に「①」が記してある。

基本的な従属接続詞は「als・bevor・dass・damit・ehe・falls・indem・obgleich・obwohl・sobald・während・weil・wenn」である。更に、ドイツ語には、品詞として接続詞だけではなく、接続詞と同様な機能をはたす「接続的副詞」もある。

品詞的に副詞なので、任意の添加成分と同様に扱われ、その枠目にでることもできるが、単純な接続詞にはそれはできない。

(39a) He could not come ; therefore he called his wife. (英)

(39b) Er konnte nicht kommen ; deshalb rief er seine Frau an. (独)

英語でもドイツ語でも例の副詞は別なところにでてもよい：

(40a) He could not come ; he therefore called his wife. (英)

(40b) Er konnte nicht kommen ; er rief deshalb seine Frau an. (独)

(39b) と (40b) の二番目の文の構造を比較しよう：

文	Vorfeld	linke Klammer	Mittelfeld			rechte Klammer
			Subjekt	Angabe	Ergänzung	
(39b)	deshalb	rief	er	—	seine Frau	an
(40b)	er	rief	—	deshalb	seine Frau	an

図7 (39b) と (40b) の後ろの文の構造

ドイツ語の接続詞的な副詞は「allerdings・außerdem・dann・daher・demnach・deshalb・deswegen・folglich・insofern・mithin・nämlich・so・sonst・trotzdem」である。

更に、次のような構造がでることもある：

(41a) Had he called his wife, she would have been satisfied. (英)

(41b) Hätte er seine Frau angerufen, so wäre sie zufrieden gewesen. (独)

英語の (41a) でも、ドイツ語の (41b) の前にでる副文は、疑問詞なしの疑問文の構造を取る。なぜかという、上に述べたとおり、従属接続詞は左ワクにでることであった。しかし、従属接続詞がでないときには、左ワクが空いてしまうようになり、それを避けるため、定形動詞は左ワクにでるようになる。もし、従属接続詞ができれば、下のようになる：

(42a) If he had called his wife, she would have been satisfied. (英)

(42b) Wenn er seine Frau angerufen hätte, wäre sie zufrieden gewesen. (独)

(41b) と (42b) の副文を比較しよう：

文	linke Klammer	Mittelfeld		rechte Klammer
		Subjekt	Ergänzung	
(41b)	hätte	er	seine Frau	angerufen-
(42b)	wenn	er	seine Frau	angerufen hätte

図 8 (41b) と (42b) の構造

上の図で明らかなように、副文の左ワクにはいつも文成分がでなければならないのである。従属接続詞がでなければ、定形動詞がその代わりにでなければならない。

## 2.5 情報の流れ

ドイツ語は、英語や日本語と同様に、古い情報が新しい情報の前に表される言語である。一般に、ドイツ語の文では、古い情報は前域にでる。そのため、「前域」は「トピック」と呼ばれることもある。逆に、中域の右のほうは「フォーカス (焦点)」とも呼ばれる。普通にフォーカスにでている文成分は補足成分である。つまり、トピックもフォーカスも機能上の位置である。それとともに、古い情報を表す文成分をその文の「テーマ (話題)」と呼ばれ、新しい情報を表す文成分をその文の「レーマ (展題)」と呼ばれる。テーマとレーマの専門用語は文の特別な位置ではなく、文成分にかかわる。

普通には、テーマの文成分はトピックにでており、レーマの文成分はフォーカスにでる。しかし、別な語順もあるので、レーマがフォーカスにでないときに、強いアクセントをもたなければならない。テーマの文成分はアクセントを一切もたない。

もう一度 (27b) を見てみよう。疑問文は「いつ」について聞いているので、それは答える文のレーマにならなければならない。そのため、(27b) の答えでは、「gestern」はフォーカスにでる。フォーカスにでないときには、アクセントが必要になる：

(43a) Wann hast du ein Buch gelesen?

(43b) **Gestern** habe ich ein Buch gelesen.

(43b) では、「gestern」はレーマに違いないにもかかわらず、トピックにでてしまう。そうすると、アクセントが必要になる。

(25) をもっと詳しく示すと下のようになる：

トピック		フォーカス				
Vorfeld	linke Klammer	Mittelfeld			rechte Klammer	Nachfeld
		Subjekt	Angabe	Ergänzung		

図9 トピックとフォーカス入りのワク構造

## 2.6 まとめ

特に、ドイツ語を英語と比較すると、重要な区別が明らかになる。英語や日本語と同様に、ドイツ語でも、古い情報はセッティングなので、新しい情報の前にでる。しかし、ドイツ語のほうが格は明らかであるから、トピックに動かせる文成分の種類はほとんど限られていない。英語では、複合体は主語・述語（つまり、定形動詞）・目的語から成り立っているので、動かす文成分にはこの複合体の成分が含まれていない。逆に、ドイツ語の複合体には主語も目的語も含まれていないので、動かせる。

更に、英語の平叙文と副文の語順は違わないが、ドイツ語の副文の語順は日本語の語順と同様である。ドイツ語の接続詞的なことばには特に注意を払わなければならない。並列接続詞と従属接続詞が起こす語順は違っている。更に、接続詞的な副詞はまず副詞なので、平叙文の中域の任意の添加成分に入る。

最後には、英語よりドイツ語では強いアクセントを利用しながら、トピックに入っているレーマの文成分をマークできる。

## 3. 日本人に間違いやすいところ

第2章にふれた内容により、第一外国語として英語を習った日本人が間違えるところはどう予想できるであろう。一般的にいえば、英語を習ってきた日本人は英語の固い文法規則を大げさにドイツ語に適用してしまうということである。

日本人の間違えるにはおもなタイプが六つある：

- ①. 「右ワク違反」：右ワクに入るべき不定形動詞の位置が違う
- ②. 「補足成分と任意の添加成分の語順違反」：補足成分と任意の添加成分の語順が違う
- ③. 「トピック違反」：トピックに二つ以上の文成分がある
- ④. 「副文の語順違反」：副文の語順が違う
- ⑤. 「並列接続詞による語順違反」：並列接続詞の後の文の語順が違う
- ⑥. 「接続詞的な副詞の語順違反」：接続詞的な副詞と従属接続詞を誤解する

### 3.1 右ワク違反

この間違えは、不定形動詞が右ワクではなく、文のもっと前にでるのである。

その原因は、英語の複合体の語順をドイツ語に適用してしまうことである。例文としては(8)と(10)で、日本人が間違えやすい文であろう。まず、過去分詞の間違った使い方を見よう：

(44a) Ich habe einen Apfel *gegessen*. (8)と同様

(44b)<sup>H</sup> Ich habe *gegessen* einen Apfel.

「<sup>H</sup>」の記号は日本人が間違える、正しくない文を示している。(44b)では、日本人は英語の語順をもとにしている：

(45) I have *eaten* an apple.

次に、話法動詞とともにでる不定形動詞の間違った語順の例を見よう：

(46a) Ich kann Japanisch *verstehen*. (10)と同様

(46b)<sup>H</sup> Ich kann *verstehen* Japanisch.

ここでも、日本人は英語の語順と混同してしまう：

(47) I can *understand* Japanese.

### 3.2 補足成分と任意の添加成分の語順違反

この間違えは、目的語または必須前置詞句の位置を任意の添加成分の位置と交ぜて間違え

ることである。図⑨が示すように、主語と補足成分は任意の添加成分を囲み、複合体のワク構造をいわば繰り返すことになる。つまり、任意の添加成分と補足成分ができれば、普通は補足成分が任意の添加成分の後にでるのである。

例として次の文を見てみよう：

(48a) Ich hatte *gestern* Fisch. (18b) と同様

(48b)<sup>Ⓜ</sup> Ich hatte Fisch *gestern*.

この間違いも英語から起こる：

(49) I had fish *yesterday*.

しかし、(48b) の文は (44b) と (46b) と違って、文法上の完全な間違いとはいえない。上に述べたとおりには、副詞「gestern」がレーマとしてでても、後ろのほうに動かすことはできず、その代わりに目的語「Fisch」を副詞の前に動かす方法しかないのである。そうするとともに、任意の添加成分「gestern」と補足成分「Fisch」が双方基本的な位置を取らないから、「gestern」に極めて強いアクセントを置かなければならない。しかし、アクセントはドイツ語の書きことばでは表すことができないので、(48b) は基本的な文と認められない。

ドイツ語を習う人々に特に分かりづらいのは、前置詞句の語順である。次の例文には、三つの前置詞句の文成分がある。そのうち、「mit meiner Mutter」は完全な任意の添加成分であり、逆に「nach Toyohashi」は完全な補足成分である。

残る「zum Einkaufen」は不必要な補足成分である。語順は次のように決まる：

任意の添加成分は基本的に補足成分の前にでる。更に、不必要な補足成分は必要な成分の前にでる。

(50a) Ich gehe mit meiner Mutter zum Einkaufen nach Toyohashi.

私は母につれて豊橋に買い物に行く。

(50b) Ich gehe mit meiner Mutter nach Toyohashi zum Einkaufen.

(50c) Ich gehe zum Einkaufen mit meiner Mutter nach Toyohashi.

(50d)<sup>Ⓜ</sup> Ich gehe zum Einkaufen nach Toyohashi mit meiner Mutter.

(50e)<sup>Ⓜ</sup> Ich gehe nach Toyohashi mit meiner Mutter zum Einkaufen.

(50f)<sup>Ⓜ</sup> Ich gehe nach Toyohashi zum Einkaufen mit meiner Mutter.

(50) のうち、(50a) が基本的な語順を示す。(50b) では、不必要な補足成分「zum Einkaufen」



をフォーカスにするため、「nach Toyohashi」を少し前に置く構造である。(50c)では、「mit meiner Mutter」をフォーカスにするため、「zum Einkaufen」を前に置く言い方である。(50d-f)は間違った文である。(50d)と(50f)では、「mit meiner Mutter」は任意の添加成分であるにもかかわらず、文末にでており、正しくない。(50e)はドイツ語の話ことばでありうるが、コンテキストのない書きことばとしてはできない。(50)のうちから、日本人がよく使い間違えるのは、(50f)である。

しかし、前置詞句に対して一番分かりづらいのは、二つ以上の任意の添加成分の語順である。一般的に言えば、任意の添加成分の枠目内には、次のような順序がある：時間・理由・場所・様態・方法という順番である。次の例文には、二つの前置詞句の任意の添加成分があり、「am Tisch」は場所を指す文成分で、「mit der Schreibmaschine」は方法を表す成分である。

- (51a) Sie schreibt am Tisch mit der Schreibmaschine einen Brief.
- (51b) Sie schreibt am Tisch einen Brief mit der Schreibmaschine.
- (51c) Sie schreibt mit der Schreibmaschine am Tisch einen Brief.
- (51d) Sie schreibt mit der Schreibmaschine einen Brief am Tisch.
- (51e)<sup>Ⓜ</sup> Sie schreibt einen Brief am Tisch mit der Schreibmaschine.
- (51f)<sup>Ⓜ</sup> Sie schreibt einen Brief mit der Schreibmaschine am Tisch.

(51)の内の基本的な言い方は(51a)である。(51b)では、「mit der Schreibmaschine」をフォーカスにするため、目的語「einen Brief」を前に置く文である。(51c)と(51d)は「am Tisch」をフォーカスにする文であるが、(51d)のほうがよい。(51e)と(51f)は日本人が間違えるような言い方である。補足成分は双方の任意の添加成分の前にでており、奇妙な文になっている。特に(51f)はまた英語からきた間違えであろう。

### 3.3 トピック違反

この間違えは一番よく起こる間違えであろう。ドイツ語のトピックの位置には一つの文成分しかでられないので、二つ以上の文成分をそこに置くと、完全な文法の間違えになる。

- (52a) Gestern habe *ich* ein Buch gelesen. (21b)と同様
- (52b)<sup>Ⓜ</sup> Gestern *ich* habe ein Buch gelesen.

このタイプの間違えはもちろん英語から伝えられてしまう：

- (53) Yesterday I read a book.

### 3.4 副文の語順違反

ドイツ語の副文の語順は日本語の普通の語順と全く同様であるにもかかわらず、ドイツ語の平叙文の語順を副文に適用するのは極めて多い。これも英語の文法をドイツ語に適用してしまう原因にちがいない。

(54a) ...dass ich Japanisch verstehen *kann*. (14) と同様

(54b)<sup>†</sup> ...dass ich *kann* Japanisch verstehen.

(55a) Als er zu Hause *ankam*, rief er mich an. (35b) と同様

(55b)<sup>†</sup> Als er *kam* zu Hause an, rief er mich an.

図8をみると、(54b)と(55b)の間違ったところは、平叙文の語順を副文に適用することだけではなく、もっと具体的には、左ワクにはすでに従属接続詞があるから、定形動詞の入るスペースはないのである。

### 3.5 並列接続詞による語順違反

英語では、平叙文と副文の語順が変わらないので、英語の後にドイツ語を習う日本人は、並列接続詞と従属接続詞の区別をじゅうぶんに意識しない。従属接続詞はつねに副文の頭にでるが、並列接続詞は二つか二つ以上の文をつなぐものである。つなぐことができる文のタイプには、確かに副文もあるが、そのときには、いつも二つか二つ以上の副文をつなぐのである。

先の文	後の文			
	平叙文	疑問文	命令文	副文
平叙文	○	○	○	×
疑問文	×	○	×	×
命令文	×	×	○	×
副文	×	×	×	○

図10 並列関係がありうる文のタイプ

つまり、平叙文は副文以外どの文のタイプと並列関係を結べ、ほかのタイプは自分のタイプだけと結ぶことができる。

(56a) Sie trinkt Kaffee, und *er* trinkt Tee. (38b) と同様

(56b)<sup>†</sup> Sie trinkt Kaffee, und trinkt *er* Tee.

見えるように、(56b) では、後の文の前の「und」は並列接続詞としてではなく、むしろ接続詞的な副詞として扱われてしまった。従って、「und」が前域にでており、文が正しくない。しかし、もし、文末では声があがれば、後の文を疑問詞なしの疑問文と見ることは可能になる：

(57) Sie trinkt Kaffee, und trinkt er Tee?

### 3.6 接続詞的な副詞の語順違反

よくでるこの間違いは接続詞と接続詞的な副詞を誤解する原因がある。この間違いが異常に多いときは、教育方法を改善しなければならない。

(58a) Er konnte nicht kommen, deshalb rief er seine Frau an. (39b) と同様

(58b)<sup>1)</sup> Er konnte nicht kommen ; deshalb er rief seine Frau an.

(56) と比較すると、(58b) の副詞「deshalb」は並列接続詞と間違えられてしまい、逆に、(56b) の並列接続詞「und」は接続詞的な副詞と間違えられてしまった。

## 4. 語順の間違いを無くす方法

間違いのタイプが様々あるので、タイプにより、改善方法策が違おうであろう。

例えば、(3.1.) の「右ワク違反」の間違いは生徒たちに口頭訓練をさせるのが一番適当であろう。ドイツ語の分離動詞はどの教科書でも比較的早くテーマとされるので、更に平叙文が基本的な文型なので、その文型にでる定形分離動詞は必ず分離させなければならないから、分離される部分はいつも右ワクにでるのである。語法動詞とともにでる不定形動詞は分離動詞の分離される部分と同様な位置を取るのですでに覚えた文法規則が適用されやすい。完了形に必要な過去分詞の扱い方も同様である。確認するため、作文などの文章をよく書かせるのも重要である。

(3.2~4) の問題点は内容的につながっている。教科書には、まず「トピック違反」の問題があるので、そのときには、特に英語との違ったところを取り上げ、意識させる必要になる。その次には、「補足成分と任意の添加成分の語順違反」の問題点があるので。この問題を意識させるには、ネイティブ・スピーカーがいれば一番よい。つまり、ドイツ語を母国語として話さない人々には、どの語順がいつ言えるか極めて判断しにくいのである。この問題点を片づけるには、特にドイツ語のワク構造の文型を取り上げつづけ、更に作文をよく書かせる必要がある。実践的なドイツ語学習に役立つドイツ語教科書では、副文は一年後からテーマにされる。そのときに、「トピック違反」と中域の語順問題をじゅうぶんに説明したら、副文の語順

を導入するのに適当な基礎ができる。特に、日本人にたいして、ドイツ語の副文の語順は日本語の基本語順と全く同様であることを強調すればよい。その段階からは、口頭訓練で知識を固めることができる。

副文を導入すると同時に、かならず並列接続詞・従属接続詞と接続詞的な副詞の品詞上の区別を意識させ、語順上の使い分けを身につけさせる必要がある。

確認方法としては、作文を書かせたり、口頭訓練をさせたりする。

一般的に言えば、この論文に明らかにしたとおり、英語の文法はドイツ語の語学学習に極めて悪い影響を与えるといってもよい。そのため、授業中は英語の例は語彙的な面だけに限るべきである。それとともに、日本人のドイツ語のスタイルも最初から観測し、必要ならばすぐ直してあげることにする。

例えば、英語の複合体は極めて固いので、英語の固い文法をドイツ語に適用してしまうと、つねに主語が先に来る。こういう文体は非常に固く思われ、ドイツ語らしくないと評価される。そのため、英語の後でドイツ語を学ぶ日本人にはドイツ語の柔らかい語順をじゅうぶんに意識させる教育方法が必要になる。

## 文献

- Eroms, Hans-Werner (1986): Funktionale Satzperspektive (Germanistische Arbeitshefte 31). Tübingen: Niemeyer.
- Gross, Thomas (1996): On Getting a Head: A Solution for Dependency Grammar. In: *Prague Linguistic Circle Papers Vol. Hajičová, Eva et. al. (eds.)*. Prague. 85-100.
- Gross, Thomas (1999): Zonentheorie: Dependentielle Wortstellungstheorie. In: 愛知大学文学論叢第120輯, 170-159.
- Helbig, Gerd & Buscha, Joachim (1975): Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. VEB Verlag Enzyklopädie Leipzig.